『知的障害生徒の性の学習権に応える授業の検討』

村上　穂高

A Class Study of Meet to Right to Study of Sex for Children with Intellectual Disability

Hodaka MURAKAMI

教職キャリア高度化センター教育実践研究紀要

第４号 （2022年１月）

Journal of Educational Research
Center for Educational Career Enhancement

No.4（January 2022）

『知的障害生徒の性の学習権に応える授業の検討』

村上穂高
（京都教育大学附属特別支援学校）

A Class Study of Meet to Right to Study of Sex for Children with Intellectual Disability

Hodaka MURAKAMI

2021 年 7 月 16 日受理

抄録：本論においては知的障害生徒の性に関する学習権が満たされていない現状を指摘した上で、性に関する学習の在り方について、学習目標、学習集団、学習方法の視点より実践を通して検討した。その結果、生徒の関心に応えるという目標の意義と、個別指導ではない集団での学習の意義、具体的な教材と体験的な経験の必要性を確認した。

キーワード：知的障害、学習権、性教育

Ⅰ．知的障害生徒に対する性教育の保障について

1. はじめに

障害者の性に関しては、北欧でのノーマライゼーション運動が紹介される中で、日本においても障害者の性を権利として捉える運動が展開されてきた[1]。2014 年に日本が批准した障害者の権利に関する条約においては、「家庭及び家族の尊重（第 23 条 1 項）」において、障害者にも生殖・家族計画に関する自己決定権があることが改めて示された。条文では性に関する決定権に関して障害のないものと障害者は同じ条件に置かれていることが確認され、性に関して他者の干渉がないことが保証されている。しかし、障害を有する者にとっては、「周囲からの良い意味での干渉がなければ性的ニーズを満たせないこと」[2]も指摘されており、障害者の性は「私的な問題でありながら社会的な領域でもある、という二面性があり、障害のある人の性の問題を個人ではなく、社会の問題として考える」[3]必要性があり[注1)]、性に関する権利を保障するための支援の在り方が検討されてきた。

2. 学習機会の保証

国際セクシュアリティガイダンス[注2)]、においても性的自己決定権を行使するには、性的な選択場面においてどのような性行動をとるのかについて内在的な判断基準を獲得している必要がある[4]とされており、そのためには「できるだけ性に関する知識を多く持っている方が賢明な行動がとれる」[5]ことが指摘されている。その意味では障害者の性に関する学習の機会が性的自己決定[注3)]を支援する上で必要であるといえる。障害のある生徒においては、定型発達の生徒が家庭や学校以外の場所で得る性の知識に関して、他者との関係性の希薄さや経験の不十分さが性に関する知識・情報の不足として顕著に現れてくるといえ、定型発達の生徒以上に構成された学習の機会が必要である[注4)]。しかし、日本の特別支援教育において、定期的に性教育を行っているのは、半数に満たない状況であり[注5)]、授業の実態としても「知的障害をもつ子どもたちには理解しにくい専門用語を駆使した内容となっているところが多い」[6]という指摘や、不定期の「性に関する指導」だけでは「問題行動へのその場その場の対応となっている」[7]点などがこれまで課題として指摘されている。また、性の学習を行う目的に関しても、これまでの特別支援学校における取り組みの多くが性的自己決定能力の育成ではなく、「①純潔教育②道徳教育型性教育③生徒指導型性教育が混在」[8]してきた現状も指摘されており、生徒の性的現実と学習要求にどうこたえていくのか、或いは生徒の性の不安・悩み、性的関心、性的欲求などに対応する教育の在り方を検討する必要があり[9]、特別支援学校における性の学習についてどういった目標を指導者で共有するのかはこれからの性教育の在り方を考える上で大きな問題である。以上より、特別支援学校における性教育の在り方について、学習目標、学習集団、学習方法の視点から実践的に検討する必要があると考えられる。

Ⅱ．取り組みの概要

１．生徒の学習権に応える授業の検討

知的障害生徒をとりまく前述の状況を踏まえたうえで、本論では以下の点を重視して授業を行った。初めに、生徒がどのような既有知識を有しているか、どのような内容に関心をもっているかという生徒の実態の把握を重視した。これまでの学習経験を聞き取った上で、生徒の実態に応じた授業内容を設定することにより、生徒の学習権を満たせるとともに、生徒の関心に応える授業を計画できると考えた。次に、前述のように特別支援教育における性教育が、純潔教育や、道徳教育型性教育、生徒指導型性教育へと傾きやすい傾向がある[注6)]ことを踏まえ性の学習権の保証を授業の目的として指導者で共有した。生徒の自己決定を将来的に育むために、生徒の性に関する知識を増やし、現在抱いている不安や関心に応えるようにした。そして、前述のように、性の学習は個別指導へと傾きやすい傾向が指摘されている点を踏まえ、個別の指導ではなく、学習集団としてクラスを対象とした。クラス集団で授業を実施することにより、知識だけではなく、仲間への共感や、仲間との違いから多様性を意識する経験など、集団でこそ深められる経験を検討した。多様な発達段階の生徒が混在する学習集団を対象とすることで、どのような指導内容や方法であれば抽象的な理解が難しい生徒であっても内容を理解しやすいのかを実践を通して検討した。

２．期間、対象生徒

20××年３月 18 日～19 日、特別支援学校高等部×年生を対象に、総合学習の時間で１回 90 分の授業を計４回行った。授業に参加した生徒は、抽象的な理解が難しい中度の知的障害を有する生徒と経験や具体的な内容であれば抽象的な理解が可能な軽度の知的障害を有する生徒の混在する９名のクラスであった。

３．事前学習による実態の把握

生徒の実態を把握することと、学習に当たって生徒の緊張を解くため、事前学習を行い、質問を通して生徒の既存の知識や興味を調べた。パワーポイントのイラストで質問を映し、「○（知っている）」「×（知らない）」「◎もっと知りたい」から選び、ワークシートに記入するようにした。質問の内容は、生命誕生に関しての「赤ちゃんがお腹の中でどのように大きくなるか知っていますか？」体の名称に関しての「自分の体の部分について名前を言えますか？」男女の身体の違いに関しての「男と女の体の同じところと違うところを知っていますか？」2 次性徴に関しての、「皆さんの年ごろに起こる体の変化について知っていますか？」交際に関しての「好きな人とのかかわり方を知っていますか？」性的被害、性的加害の防止に関しての「嫌な関わりがあった時にどうすればよいか知っていますか？また、どのような行為が相手が嫌がるか知っていますか？」多様な性の在り方に関しての「色々な好きのかたちをしっていますか？」である。理解して応えられない生徒もおり、その場合は問いやイラストに対する生徒の反応などを記録するようにした。なお、答えたくない質問には答えなくてよいと伝えた。

１）事前学習での生徒の様子

初めに、性の学習をしたことがあると答えた生徒は半数いた。ただ、内容について尋ねると、「昔のことだから覚えていない」「体について習ったような気がする」と詳しく記憶していない様子であった。「生命誕生」についての質問では、こちらが示した胎児の写真を見て、人の胎児だとは分かった様子であったが、尾が生えていることが不思議であったらしく、興味を示す生徒がいた。「体の名称」に対する質問では、「目、鼻、耳」などの外部から分かる器官に関しては、抽象的な理解が難しい生徒も応えられていた。しかし、内臓について正確に応えられる生徒はおらず、心臓を指して「肺」と答えるなど基礎的な知識が不足している様子が見受けられた。結果、「知りたい」に印をつける生徒が多かった。「男女の違い」についての質問では「知らない」と答えた生徒とともに、「知りたい」に印をつける生徒が複数いた。「2 次性徴」については、「みんなの体は、子どもから大人になる途中だね」とイラスト[10]を用いて説明した上で、「ひげが生えてきたりする人もいます」などを例として伝えると「僕は生えてきた」と答える生徒もいたが、「まだ生えてないしなあ」と答える生徒もいた。しかし、「知りたい」に印をつける生徒はいなかった。「交際」では、初恋に関しての写真絵本[11]を見せ、「もし、好きな人ができたらどう告白したらいいでしょうね？」という質問を投げかけた。「指輪を贈ればいい」という幼さの残る答えもあったが、「好きだと告白して付き合ってもらいます」という年齢相応の答えもあった。生徒が「恋愛・交際」に関心があることは伝わってきたが、「知りたい」に印をつけた生徒はいなかった。「性的被害・性的加害の防止」に

関する質問では、指導者が二人で劇を演じ、下校時に身体を触られそうになるという被害の様子や、スカートめくりなどを冗談でするなどの加害の様子を示した。生徒からは「それは、だめ」「悪いことだ」という意見や「携帯電話でそういう事件がのっている」「携帯電話の情報で知ってる」と携帯電話などで情報を得ている生徒もいた。「様々な性の在り方」に関する質問では、指導者が同性愛のイラストを提示して「男性同士や女性同士も好きになることがあります」と伝えた。生徒の中には「げえ、いやだ」と嫌悪感を示した生徒もおり、同性愛について偏った価値観を有している様子であった。最後に性や体について授業で知りたいことがあれば記入するように伝えたが「どうして声変りをするのか」という声変りに関する質問が２件あった他は「特にありません」と無記入であった。

２）事前学習を通して

今回のアンケートでは、「知っている」と答えた生徒においても、実際には殆ど既有の知識がないことが、発言を通じて確認できた。また、学習の経験がないゆえに「交際」や「二次性徴」についての質問の場面などでは、「知りたい」という好奇心を生徒自身が抑制している様子も見受けられた。また「交際」の質問で、好きな人への告白の仕方で「指輪を贈る」と答えた生徒や、身体の名称に関してすべての生徒が身体の器官について知らないなど、生徒達が高等部という年齢に反して知識が不足していたり、幼い意識を持っている実態が明らかとなった。また、「二次性徴」に関して「まだひげも生えていないしなあ」「どうして声変わりしますか」と答えた生徒のように、身体の発育に不安を持っている生徒もいた。最後に生徒自身が知りたいことが殆ど書かれなかった点に関しては、生徒が性の学習についての基礎的な知識が足りず「知りたい」という感情を抱けていない、或いは交際などに関して興味を持ちながらも、よくないこととして抑制している可能性が想像できた。また、数名の生徒はメディアを通して同性愛に関する偏見を抱いている様子が見受けられた。

４．授業計画

事前学習を通じて、生徒の実態を把握した上で当初予定していた内容よりも初歩的な内容から教える必要を感じ、以下のように学習内容を計画した。①生命や身体に関して初歩的で基本的な内容から教えること②性の多様性について正しい理解を進めること[注7)]、③身体の成長や恋愛感情など、生徒の発達を肯定的に扱うこと、を授業の目標として以下のように授業を計画した[注8)]。（表１）

表１．授業計画

次	時	学習活動
1	1.5 時間	○「生命誕生」 ・胎児がどのように大きくなるのかについて写真を見ながら知る ・家庭から乳幼児期の写真を持ってきて見る。保護者のメッセージを聞く ・子供時代の物（肌着、おもちゃ、絵本など）を見せ合い、思い出を語る ・幼いころの写真と拡大した保護者のメッセージを持ちセルフポートレートを撮る
2	1.5 時間	○「妊婦体験」 ・妊娠エプロンをつけて体験してみる。母の気持ちを想像する ○「身体の名称」 ・心臓、肺、胃、肝臓、腸などの基本的な臓器の名称と位置、役割を学ぶ
3	1.5 時間	○「男女の体のしくみ」（男女別で実施する） ・イラストを見ながら男女の性器のちがい、思春期の身体の変化を確認する ・身体に関する悩みなどを話し合う ○「性被害の防止」 ・プライベートゾーンの扱いについて学ぶ ・どういった行為が性被害なのか、どういった場面で性被害に遭いやすいのかを確認する ・「嫌」と拒否する練習をする ○「性加害について」 ・学校生活の場面で不適切な行為がないかを振り返る
4	1.5 時間	○「多様な家族」 ・家族の写真や思い出の品を持ち寄り、自身の家族の在り方を伝え合う ・多様な家族の在り方があることを確認する ○「交際」 ・家族や友人とは違い、恋愛の対象として「好き」の感情が産まれる時期であることを知る ・恋愛感情により、心理的な不安になることや、気持ちの伝え方などを練習する

		・多様な性愛の在り方を確認する 〇まとめ ・これまでの性の学習に関して感想を書く

５．授業の実施

授業の内容と生徒の様子を記す。

１）１回目の授業

最も基本的なテーマとして「生命の誕生」を扱った。自らがどのように産まれたのかというルーツを確認するとともに、自らの命の成り立ちを学ぶことを通して、自己を見つめ、親・家族の思いを確認し、自己肯定感を育むことを目的とした[12]。事前に保護者の方にお願いをして、生まれたときの写真と、当時使っていた日用品（肌着、おもちゃなど）を持ってきて頂き、生まれたときの感想や現在の生徒へのメッセージをプリントに記入して頂いた。授業の後半では、自身の成長や保護者のメッセージを残すため、拡大したメッセージを印刷し、幼児の頃の写真を胸に抱き、衝立で囲ったスペースの前で自身でカメラのスイッチを押して撮影するセルフポートレートづくりに取り組んだ。

（１）授業での生徒の様子

はじめに、授業での決まり事として「①この授業で知った他の人の秘密は話さないこと、②授業では性器の名称を口に出してよいが、他の場面で発するとマナー違反となること、③授業で習ったことは家庭でも話し合ってほしいこと」を生徒に伝えた[注9)]。生徒にイラスト[13]を示して「人間は何から産まれるか知っているかな？」「卵から産まれる？」「コウノトリが運んでくる？」と聞いた。生徒は笑いながら「違う」と首をふり「お母さんから」と答えた。その言葉をうけて「そうですね。子どもは、皆、女の人（お母さん）から産まれます」と伝えた[注10)]。その後、教室を暗くし胎児が成長していくスライド[14]を見せた。教室は静まりかえり幻想的な空気が流れた。受精卵から胎児が人の形になるまでを伝え、「これは、しっぽだね。初めはしっぽがあります」と伝えると、生徒は「え、しっぽがあるの」と不思議そうにしていた。そして、次第に顔の輪郭や、目、耳などが出来上がる場面を映し、生徒に身体の部分を聞くと、「目だ」「耳」と答えていた。また、臍帯を通して栄養を受け取ることを伝えた。赤ちゃんが産まれる瞬間には、赤ちゃんも頑張るが、妊婦さんも大変苦しいという話、また傍にいる父親なども一緒に応援しているという話を指導者の身体験談も含めて語った。その後、生徒の幼児の頃の写真と、思い出の品をスライドで映し保護者からのメッセージを読み上げた。生徒達は、家庭からぬいぐるみや乳児用のおもちゃ、肌着などを持ってきており、「これ、今、着られるかな？」と、問うと「きれない！やぶれるよ」と答え、指導者からは「大きくなったってことだね」と言葉を返した。幼児の頃の写真には、みな興味を持ち、「かわいい」「誰のだろう」と注視していた。抽象的な理解が難しい生徒でも、自分の発表の番がきたら嬉しそうに人形を取り出したり、自分で写真を持ちだし、発表していた。保護者の方からのメッセージには、「やっと会えたね」「初めて肌に触れたとき、温かかった」「元気に産まれてくれてよかった」「うれしかったよ。大好きだよ」「桜が満開でした。」という当時を思い出しての言葉が述べられ、現在の生徒へのメッセージとして、「成長したね」「とても立派になったね」「〇〇が笑うと楽しくなります」「お姉さんになったね」という温かい言葉が述べられていた。指導者が代読すると、生徒達は皆嬉しそうにほほ笑んでいた。生徒にその場で感想を聞くと「めっちゃ、うれしかった」「懐かしい」「全然、今と大きさが違った」という言葉が返され、教室は温かい空気に包まれたように感じた。その後、一人ずつ幼児の頃の拡大した写真と拡大した保護者からのメッセージを持ち、セルフポートレートを撮影した。「照れる」と言う生徒もいたが、自身でポンプ式のスイッチを使い表情を意識しながら写真を撮り、皆、笑顔で写真に納まった。その日の感想としては、赤ちゃんが大きくなる様子について、「赤ちゃん、ちっちゃいです」「耳とか目ができてすごい」「体の中からうまれる」「お母さんは頑張って出産しました」「段々大きくなってきたのが分かりました」と書かれていた。また、保護者からのメッセージについては、「とてもうれしかったです」「すごくうれしい、恥ずかしかったけど、てれくさかった」「生んでくれてありがとう、育ててくれてありがとう」と書かれていた。

（２）授業を振り返って

生命がどのように産まれるのかについて、生徒は母親から産まれるということは知っていたが、実際に胎児が育っていく過程は初めて知ったようであり、感想でも興味深かった様子が書かれていた。自身がどのように命と

して形作られたのかを知れたことによる安心感も生徒からは感じられた。また、保護者からのメッセージでは、保護者の方も当時を思い出された様子で熱のこもったメッセージばかりであり、全ての生徒が嬉しそうにしていた。一部の生徒は、父親や兄にも感謝を書いており、出産に関わる母だけではなく家族への感謝の気持ちも確認できた様子である。また、「誰のだろう」と仲間の幼い頃に興味を持つことでクラスの中で一体感が生じ、仲間への思いも膨らんでいた。生命誕生は、本来であれば小学部高学年向きの授業の内容ではあるが、多様な発達段階の生徒が構成する高等部のクラス集団においても自己肯定感を育て、クラス集団としての思いを育むなどの効果を生むテーマであると考えられた。

２）２回目の授業

前回の「生命誕生」の授業からのつながりを意識して「妊婦体験」と「身体の名称」をテーマとして行った。妊婦体験を通して母の気持ちを想像することをねらいとした。また、事前学習では、臓器の名称や働きが理解できていないということが明らかになったので、身体の臓器の名称と働きを確認することにした。

（１）授業での生徒の様子

生徒には赤ちゃん人形の入った布を腹部に括り付けエプロンをつけることで妊婦の重さを体験できるようにした。しゃがんで物を拾う動作、寝る動作、歩く動作、階段の昇降などを行った。「男だしやりたくない」という生徒もいたが、女性の気持ちを分かる意味でも大切なことだと伝えると納得していた。寝る動作や拾う動作に対しては、「無理」「ちょっととりにくい」、階段の昇降では、「足元が見えない」と不安そうに話す生徒がいた。その他の意見として体験を通して「幸せな気持ち」と答える生徒もいた。抽象的な理解が難しい生徒でも、自然にお腹を支える様子や、嬉しそうにお腹をなでる様子もみられ、つらい、大変という気持ちだけではなく、お腹に赤ちゃんがいることを想像し、愛しい気持ちになった様子であった。指導者からは「お母さんも、みんながお腹にいたときはうれしい気持ちだったんだろうね」と話しかけた。その後、赤ちゃんの人形を抱く体験も行ったが、首が座らない赤ちゃん人形を抱き、「持ちにくい」と言う生徒や、嬉しそうに赤ちゃんを見せる生徒、自然に身体をゆする生徒、「妹を抱いていたのを思い出した」と上手に抱く生徒もいた。

「身体の名称」の学習では、心臓、胃、肺、腸、肝臓などの臓器が身体のどの位置にあるのか、どのような働きを持っているのかを確認した。ラミネート加工した臓器のイラストを生徒に渡し、生徒の既有の知識を調べる意味で、自分の身体に貼ってみるように伝えた。ただ、渡された臓器は立体ではなく平面だったこともあり、臓器のイメージが持てず、足や手に貼ってしまう生徒や臓器のイラストを重ねて貼ってしまう生徒もおり、結果として全ての生徒が正しい位置には貼ることができなかった。その後、臓器の正しい位置と、働きをイラストを示しながら伝えた。腸については、「栄養を吸収し、うんちを出す」という内容が分かりやすいようで、生徒は理解している様子を示したが、心臓に関しては、働きに関する質問に対し、「時間を刻んでいる」という生徒がいたほかは、他の生徒は全く答えられなかった。また、肺についても「空気？」と呼吸に関係していることは分かっている様子であったが、酸素や二酸化炭素の説明の理解は難しかった。

（２）授業を振り返って

妊婦体験では、当初、ねらいとしていた母親の妊娠時のつらさを感じることだけではなく、子どもができたときの愛しい気持ちなどを感じる生徒が多くいたことは予想外であった。母親の役割の体験という目的を超えて、弱い者への労りの気持ちを抱くなど、学習が発展的に進んだといえる。しかし、「身体の名称」に関しては、教材として用意していたものが平面であったことからイメージが付きにくく、フェルトなどでの立体的な形を作るなどが必要であったと反省した。また、各臓器の役割についても言葉とイラストだけでは理解できておらず、今後は、日常の経験（お腹を壊す、動悸がする）などと結び付けながら理解できる経験を改めて設定していく必要性を指導者で確認した。

３）３回目の授業

前回の授業では、男女の身体の共通性を前提に取り組んだが[注11)]、本授業では、「男女の身体の仕組み」について勉強した。男女別に分かれ、安心して話せる環境を設定した。内容としては、男女の性器の各部分の名称、二次性徴で起こる身体の変化、身体に関する悩みの話し合いであった。その後、男女が合流し、多様な性の在り方やプライベートゾーンについて学び、「性被害」や「性加害」の問題について学習した。

（１）授業での生徒の様子

男子の話し合い場面では、男女の性器の各部分（女性は、卵巣、卵管、子宮、膣口、男性は精巣、精管、ペニスなど）を図で示し、名称と役割を伝えた。男子生徒は、異性の性器に関してこれまで学ぶ機会がなかった様子であり、図を見て「恥ずかしい」という生徒もいた。しかし、同じ生徒が授業を進める中で「こうなっているのか」「見たことない」と納得できており、知りたかったが聞けなかった内容を知れて安堵していた様子であった。女性の身体に関しては、肛門以外の部位に関してはみな答えられなかった。また、自身の性器の名前についても尿道や精巣など基本的な情報を知らなかった。その後、性器の形状などは人それぞれであること、また、数は少ないが、両方の性器を併せ持つこともあることを話したが、想像できていない様子もあった[注 12)]。その後、二次性徴として、身体にどのような変化が起こるか生徒と共に考えた。指導者がヒントを出しながら、「声変りがする」「ひげがはえてくる」「腋毛が生えてくる」などを答えることができた。その他にも、「ペニスが大きくなる」「ニキビができる」などを伝えた。その後、身体の悩みについて「ニキビがある」「匂いが気になる」「身長が低い」「性器の形が気になる」などの例を示し、「君たちの年齢はそういったことで悩みやすい年ごろです」と伝えると、複数の生徒から身体についての悩みが出てきたため、指導者の経験を基にして助言を与えた。

男女が合流した後は、男女の違いだけではなく、性同一性障害や、女装、男装の方もいるという性の多様性についても伝えた。生徒達は、次々に芸能人の名前を挙げており、ＴＶを通してある程度、理解している様子であったが、タレントは、そういった特徴を強調している場合があることを踏まえ、個性として認められるべきであることを伝えた。その後、性器を含めた部分をプライベートゾーンといい、特に大切な部分であることを伝えた。抽象的な理解の難しい生徒であっても、拡大した裸体の性器の部分を水着のイラストで隠そうとするなど、ある程度意識できていた。プライベートゾーンは大切な部分であるので、「見せない」「言わない」「触らせない」ということを確認した。ただ、禁止の言葉にならないように「誰が触ってよいか、誰に見せるかは自分で決めること」という性的自己決定の視点も加えるようにした。その後、絵本[15]を使い、自身の嫌な関わりをされた際に、「嫌」という練習を行った[注 13)]。指導者が不審者の役をすると、生徒は、小さな声で「いや」と言ったり、無言で逃げたり、大きな声で「向こうにいってください」と自分なりの避け方を表現できていた。その後は、自分たちの生活に引き付けて「普段の生活でも実は嫌な思いをしたり、気づかないうちに嫌な思いをさせていることはないかな？」と尋ねた。生徒からは、「（友達の）距離が近いといや」「トイレの前にいるひとがいる」「持ち物を触られたりするのはいや」と気になることが出てきた。お互いに気持ちよく過ごせるように気をつけていくことを確認して授業を終えた。授業後のアンケートでは、「男女の違いがわかってよかった」「難しかったけれど勉強になった」「僕は毛が生えている。大人になった気分」「難しかった」という答えがあった。性被害、性加害の問題については、「止めてといえた」「ちかんにも気をつける」「触らない、近づきすぎない、難しかったけれど勉強になってよかった」「怖い時にはにげる」という意見が書かれていた。

（２）授業をふりかえって

男女別で行ったことに関しては、恥ずかしい生徒も安心して進められたという利点と、女子生徒は理解が難しい生徒が多く、授業が進めにくかったという点が指摘された。ただ、異性の身体についてしっかりと学ぶ機会があったことで、知りたくても知れなかった気持ちを解消できてすっきりとした様子を見せる生徒もおり、学習の意義を確認した。二次性徴についての学習ではひげや腋毛などの外面の変化に対し、「大人になった気分」と感想を書くなど、これまで以上に自身の変化を肯定的に捉えられる機会となっていた。性加害の話でも、「嫌」という経験ができたことは生徒にとっても自信となった様子であった。感想には、「勉強になった」というように知れたことに対する安心感が現れており、生徒達は男女の身体の構造や思春期の身体の変化について学ぶ機会を求めていた様子が感じられた。ただ、授業の最後に、生徒の普段の生活に引き付けたことは、性に関しての抑制や禁止のメッセージを持たせてしまった可能性も考えられ、今後の課題と考えた。

４）４回目の授業

「多様な家族」「交際」をテーマとした。「多様な家族」では、事前に、家族の名前、続柄、印象、思い出をプリントに記入し、思い出の品や、家族写真などを生徒が持参した。それぞれの家族の特徴や違いを知ることで家族の多様な在り方を理解するとともに、離婚、再婚などの家族に起こりうる出来事についても知ることを目的とした。「交際」では、家族を大切に思う気持ちとともに、恋愛感情も芽生える時期であることを伝え、それに伴い、気持ちが不安定になることや、気持ちの表現ができずに不安になるなど、様々な悩みが出てくる時期でもあ

ることを確認した。相手に気持ちを適切に伝える練習や、将来、好きな人ができたときに、一緒に行きたい場所を考えることなど、具体的な行動も練習した[注14)]。

（１）授業での生徒の様子

それぞれの生徒が家族について発表した。「お母さんは怖いけど、お父さんは優しい」と答える生徒がいる一方で、「お母さんは優しいけれど、お父さんは少し怖い」など、父や母に対する印象が家族によって違うことや、兄弟がたくさんいる家族、祖父母がいる家庭、一人っ子の家族など家族の構成員の違い、また、「お父さん」「お母さん」と呼ぶ場合や、「アッパ(韓国語で父)」「オンマ（韓国語で母)」など外国にルーツを持つ家庭では父、母の呼び方が違うことなど、発表を通じて多様な家族の在り方を確認できた。また、生徒は、「お母さんの仕事場へ行ったことがある。お母さんの作った製品は街でよくみかける」「お父さんは何でも教えてくれる」など、両親を誇らしげに語る様子や「お父さんはいつも守ってくれる」「お兄ちゃんはやさしい」と家族の優しさについて語るなど家族が自身を見守り育む存在であることを確認する機会ともなった。写真や具体物を持参してもらったことにより、言葉や文字だけでは理解しにくい生徒も、興味を持って発表を行えていた。その後、絵本[16]を用いて、父子家族、母子家族、同性愛の家族、また、一人で生活する場合など、多様な家族の在り方が存在することを確認した。同性愛については、これまでにも伝えてきたこともあり、「お父さんとお父さんの家族もおられます」と伝えると、生徒は納得して聞いていた。また、家族に起きるかもしれない出来事として、離婚や再婚を伝えた。離婚については、「(もし、両親が離婚すると）寂しい」と声を漏らす生徒もいたが、必ず起こるとは限らないことや、起こったとしても子どもの責任ではないことなどを絵本[17]を参考にして説明した[注15)]、家族への思いを確認した後で、家族以外の人への「好きという思いが芽生える時期でもある」ことを伝え、「交際」のテーマへと移った。ＴＶのアイドルや漫画のキャラクターにあこがれを持つこと、具体的な誰かを好きになること、或いは誰も好きにはならない[注16)]など、人によってさまざまな「好き」の在り方があることを伝えた。生徒達は、口々に「私はいる」「まだいない」「ＴＶで好きな人がいる」など嬉しそうに話しだし、興味があるテーマであることが伝わってきた。人を好きになると、どう伝えてよいか分からずに困ることや、やきもちをやいて気持ちがイライラすること、あえて相手をからかったりしてしまうことなどもあると伝えた。伝え方が分からないという生徒の為に、気持ちを伝える練習を指導者と行った。気持ちを書いた手紙を小道具として使ったが、恥ずかしがりながらもみな積極的に、「私がする」「次は僕が」と楽しんで参加していた。「手紙を読んで返事を下さい」と伝えるなど、自分の言葉で落ち着いて練習できる生徒が多かった。そして、「将来、好きな人ができたときにしたいこと」を記入した。生徒の中には、好きな人としたいこととして、「散歩」「動物園や映画館」「食事」「プレゼントの交換」などに〇をするとともに、「家でゆっくり過ごす」「ラインや電話をしたい」「電車やバスに乗る」など自分で考えて記入する生徒もいた。授業の最後に４回にわたった性の学習全体に関して感想を書き、授業を終えた。感想では、楽しかったこととして、「皆の赤ちゃんの写真がめっちゃかわいかった」と「生命誕生」の授業での思い出を記入する生徒が多くいた。また、授業後に指導者に歩み寄り「もっと性教育の勉強がしたい。教えて欲しい」と伝える生徒もいた。

（２）授業を振り返って

９名の生徒であったが、家族の構成や家族への印象など、発表を通して多様な家族の在り方を確認でき、それぞれの家族がどれも素晴らしい存在であることを生徒は確認できていた様子であった。その後の「交際」に関しては、生徒達の興味の強さが感じ取れた。生徒達は、特定の異性が好きな生徒や、アイドルが好きな生徒、同性を友達として好きな生徒など、違いや発達の差はあったが、そういった様々な生徒の思いを肯定的に受けとめる機会となった。事前学習では好きな人ができたら「指輪を贈る」と発言していた生徒も、気持ちを伝える体験では「手紙をよんで、返事をください」と現実的な言葉で気持ちを伝えられており、気持ちの適切な伝え方も学べた様子であった。また、授業後のアンケートでは、性の学習を楽しめたことやより学びたい意欲が伝わってきた。

Ⅲ．取り組みのまとめ

本授業では、これまでの性に関する学習の在り方の課題を示した上で、学習目標、学習集団、学習方法について検討をした。取り組みを通しての成果と課題を以下にまとめる。

１．成果について

１）実態把握の必要性

事前学習を行うことで、生徒の発言から性の学習の経験が殆どなかった実態や、性に対する興味や好奇心を抑制している様子、メディアの影響からの偏見などを確認することができた。このような実態把握を行ったことにより①生命や身体に関して初歩的で基本的な内容から教えること②性の多様性について正しい理解を進めること、③身体の成長や恋愛感情など生徒の発達を肯定的に扱うこと、などの学習目標と学習内容を適切に設定することができたと考える。性に関する知識に関しては、年齢だけではなく生活環境や学習の経験により差があり、性教育の実施に当たっては対象とする生徒達の実態を把握することが有効であることを改めて確認できた。

２）多様な生徒の混在する学習集団の意味

本授業では理解度に応じた生徒集団の選定や個別の指導ではなく、普段の学校生活を共にしているクラスを集団として学習を行った。「生命誕生」では、仲間の幼い頃を知ることでクラスの中で一体感が生じていた。また、妊婦体験では苦しいという思いだけではなく、「幸せな気持ちになった」というように、経験を通して弱者への労りや生命を慈しむ思いが芽生え、それを皆で共有できていた。そして、「家族の多様性」においては、仲間の家族を知ることで多様な家族の在り方を確認できた。性の学習の意義は性に関する知識を学ぶことだけではなく、多様な感情を仲間とともに共有することや、お互いの多様性に気づけることでもあるといえる。こういった学びは、これまで経験を共にしてきた集団でこそ深められ、活かされると考えられる。性の学習を多様な生徒を含む集団において授業として扱うことにより、単なる性的な知識の伝達を超えた意義が産まれると考えられる。

３）指導技術の蓄積

理解が難しい生徒に対して、指導内容や方法について、授業後に指導者間で検討を行った。結果として体験的な内容と具体的な教材が重要であることを改めて確認した。妊婦体験では抽象的な理解が難しい生徒においても、自然にお腹を支える動作をしたり、愛しそうに人形をあやす動作をしたりするなど、自分の思いを表現できていた。また、性的被害を避けるための「嫌」という体験や、好きな相手への告白の体験など、普段は口にしない感情を言葉にして現すという体験も生徒の自信につながった様子であった。そういった意味で身体感覚を基に学べる具体的な教材や学習経験が有効であると考えられる。反面、身体の臓器を平面で作成した教材では、生徒は臓器どうしを重ねてはってしまうなど、自身の臓器とイラストの臓器を結びつけて考えられていない様子であり発達段階に応じた具体性のある教材を用意していく必要性を確認した。今後は、教材や教授法の情報を指導者間或いは、学校を超えて共有していく必要があると考える。

４）知る権利を保障する学習

本実践では、特別支援教育における性教育が生徒指導型性教育などへと傾きやすい傾向があることを踏まえ、生徒の性の不安・悩み、関心に答えることを目的として授業を行った。「男女の身体の違い」の授業では、これまで興味を持ちながらも知る機会がなかった異性の身体について、授業を通して「そうだったのか」と納得した姿や自身の成長を肯定的に捉えられた様子を確認できた。「恋愛」のテーマでは、人を好きになることを肯定的に受け止め、適切な言葉で伝え、自信を得た生徒の姿を確認できた。結果として、事前学習では好奇心を抑制し、知りたいという思いを表現できていなかった生徒においても、最後に「もっと性教育の勉強がしたい」と伝えるなど、より深く知りたいという思いも芽生えていた。こういった姿は、性に関して禁止したり抑制する学習ではなく、生徒の関心に答え、学ぶことを指導者と生徒がともに楽しむことや、生徒の思いを肯定する学習経験でこそ生まれたと考える。生徒が学習で得た安心感が、より知的な好奇心を持つことにつながったと考える。

２．課題

１）継続的な性教育の実施と、教師の専門性の向上

本学年においては継続的な性教育の実践が行われていなかったこと、授業者にこれまでの性教育の経験が少なかったことにより、教材の在り方、学習内容の決定に関して課題を残すこととなった。今後、授業の機会を継続して持ち、授業記録を残すことにより、学校全体で専門性の蓄積と共有を行うことが求められる。学習経験が少なかったことが、高等部の生徒としては初歩的な知識を知らないという実態につながったと考えられ、今後は、継続的な学習機会の確保を図るなどカリキュラムの在り方を検討する必要性がある。また、高等部を卒業した後の生徒の学習の機会の確保も考えるべき課題である。

２）メディアリテラシー

事前学習における実態把握において、数名の生徒はＴＶなどのタレントを通して同性愛について誇張された特徴を受け取っているものもおり偏見も見られた。知的障害生徒のメディアリテラシーの問題と必要な実践については今後、筆者自身の実践を通して明らかにしていきたい。

３．おわりに

本実践では生徒は単に性的な知識を学んだだけではなく、自身の存在を肯定される経験、生命を慈しむ経験ともなっていた。「そういった生徒の豊かな感情経験に接する中で、指導者の性に関する意識も、自身や異性の身体構造や機能を知識として理解することという狭い理解から、自分自身や他者の精神や肉体を慈しむことや、包括的に人間らしくいきていくための基礎知識[18]であるというように理解が広がった。今後も教師自身が「性の問題に関しては答えがないということを謙虚に受け止め、悩みながら葛藤」[19]することで実践を深めていく必要を感じた。

注

注 1）厚生労働省社会保障審議会障害者部会で検討されている「意思決定支援ガイドライン（案）の概要」には意思決定の内容について（２）人生の領域に「住む場所、働く場の選択、結婚、生涯福祉サービスの利用等」とあり、これまで支援課題とは捉えられていなかった結婚が内容に挙げられている（平井威(2016)を手わたす』学術研究出版）

注 2）国連合同エイズ計画、国連人口基金、国連児童基金、世界保健機関の協力の下、国連教育科学文化機関・ユネスコによって作成され、2009 年公表された。改訂版は、2018 年に公表された。

注 3）浅井は、性的自己決定について「①必要な知識、②性行動を行う上で何を大切と考えるかという価値観③性の健康を日常生活で守れることや性の場面に対応できるスキル④必要な意思表示などの態度、⑤賢明な判断による行動などの要素」(浅井春夫(2005)『子どもの性的発達論 入門―性教育の課題にチャレンジする試論 10 章』十月舎 5 頁）が必要であるとしている。

注 4）性に関する情報と障害のある子どもとの関係について、土屋は、障害のある子どもがセクシャリティへの接近が困難な理由として、直接的なバリアである、映画に行く、外泊する、などのアクセスの困難などに加え、情報面でのバリアとして、性に関する書物や雑誌などを手に入れることが難しいこと、また、友人や兄弟とも話していないことから性の情報の正確さについて議論をしたり、性を個人の生活の一側面であると位置付ける機会がないという関係性の欠如、そして、家族からの抑圧やプライバシーの欠如の問題などを指摘している（倉本智明（(2005)『セクシュアリティの障害学』明石書店　238 頁を要約）

注 5）児島他（児島芳郎、越野和之、大久保哲夫(1996)「知的障害児の性教育に関する一考察―養護学校全国調査より」奈良教育大学紀要 45 巻、204 頁）によると、小学部 18%、中学部 22.2%、高等部 46.1%であり、不定期の「性に関する指導」のみを行っているのは、小学部 42.2%、中学部 44.0%、高等部 21%となっている。

注 6）特に交際に関しては「学校教育の中でも、恋愛や結婚という青年成人期の課題に見通しをもった教育内容は全くなく、それどころか学校現場では男女関係に関しては、抑制・禁止の教育」（季刊セクシュアリティ(2013)増刊号、エイデル社、101 なっている点が課題として指摘されている。

注 7）浅井は「同性愛をどう理解するかが人権意識を計るリトマス試験紙となっているといえます。」（浅井春夫(2005)『子どもの性的発達論 入門―性教育の課題にチャレンジする試論 10 章』十月舎　152 頁）として、同性愛指向の子どもへの援助の在り方と、同性愛への差別・偏見に対しての人権尊重の働きかけの必要を重要な人権教育として位置付けており、知的障害児にとっても例外ではないと考える。

注 8）本実践の「生命誕生」に関しては、永田三枝子「生い立ちの記」「赤ちゃん研究」の授業（(季刊セクシュアリティ(2013)増刊号、エイデル社、48 頁)、日暮かをるの「生い立ちの学習」（(季刊セクシュアリティ(2013)増刊号、エイデル社、113 頁）の実践を参考にした。

注 9）授業での決まり事に関しては、オランダにおける性教育の授業実践を参考にした（リヒテルズ直子(2018)『0 歳からはじまるオランダの性教育』日本評論社　145 頁)。

注 10）現代的な問題として代理母や、産みの母の存在などを考え授業では母からではなく女の人から産まれるとした。

注 11）性教育についての男女の身体の学習に関しては差異の強調と確認のための実践よりも共通項の圧倒的な多さ、重なりに着目をしながら授業展開を進めていく必要があり、男女の身体の違いの強調は排除行為や偏見を助長・拡大する可能性もあること、こういった分類とちがいの探求から共通性の探求へと学習のベクトルの転換をはかる必要を浅井は指摘している（浅井春夫(2020)『包括的性教育:人権、性の多様性、ジェンダー平等を柱に』大月書店、122 頁を要約)。

注 12）浅井はセックスは性器も男女の 2 類型だけではなくインターセックス（半陰陽）などの多様なバリエーションがあること、女性、男性以外に多様な中間性に性が分化するというグラデーションであることを伝える必要を指摘している（浅井、(2005)『子どもの性的発達論 入門―性教育の課題にチャレンジする試論 10 章』十月舎 57 頁を要約）

注 13）性被害の防止に関して、「①いやな触れ合いと心地よい触れ合いを分ける力を育むこと、②「いやよ！」といった言語による表現方法や感情表現を体得すること、③プライベートゾーン（口、性器、胸、お尻）の自己管理能力を高めること、④被害を受けたり、受けている人を見たら、身近な信頼できる大人にすぐ話すこと、その言葉を具体的に話してみるトレーニングをすることが重要であるとされており（浅井春夫(2005)『子どもの性的発達論 入門―性教育の課題にチャレンジする試論

10 章』十月舎　152 頁)、本実践においても参考とした。
注 14) 知的障害者の恋愛に関して平井は知的障害者のライフコースにおける生活構造において定型発達者の人々とは著しく異なる点として、恋愛関係、結婚・パートナーとの生活、子育て経験という人生ステージの欠如を挙げ（平井(2016)『ブ―ケを手わたす 知的障害者の恋愛・結婚・子育て』5 頁を要約）その原因として、知的障害者がその暦年齢に応じて経験しうる出来事を関与者たちが排除している可能性を指摘している（平井(2016)『ブ―ケを手わたす 知的障害者の恋愛・結婚・子育て』27 頁要約)。
注 15）浅井は、「未婚、非婚、避婚」というテーマについて、人生の選択肢には結婚をしない選択があることを伝える必要性とともに、今後シングルライフという選択が現実味を帯びた課題となっていること（浅井春夫(2005)『子どもの性的発達論 入門―性教育の課題にチャレンジする試論 10 章』十月舎　152 頁、144 頁を要約）を伝えているが、本授業でも今後、彼らが経験しうる家族の出来事について理解することや多様な家族の在り方を理解できることを目的とした。
注 16）性的思考がない人は「Ａセクシャル」というが「セックスすることや恋をすることが当たり前のこととされ、ときに強迫的に要求される社会にあって[中略]性的なコミュニケーションの機会の大小が生の価値をも自動的に決定するかのように考えるのはイデオロギーの効果以外の何物でもあるまい」（倉本、2005、34 頁）という指摘にもある通り、必ずしも人を好きになることを前提として授業を進めることがないように留意した。

参考文献

1　ベンクト・ニイリエ、(2004)、『ノーマライゼーションの原理』、現代書館
2　結城康博、米村美奈、武子愛、後藤宰人、(2018)、『福祉は性とどう向き合うか』、ミネルヴァ書房、64 頁
3　坂爪慎吾、(2017)、『障がいのある人の性』、中央法規出版、226 頁
4　浅井春夫、(2005)、『子どもの性的発達論 入門―性教育の課題にチャレンジする試論 10 章』、十月舎、5 頁を要約
5　浅井、(2005)、前掲書、60 頁
6　谷口明広、(1998)、『障害を持つひとたちの性』、明石書店、16 頁
7　児島芳郎、越野和之、大久保哲夫、(1996)、「知的障害児の性教育に関する一考察―養護学校全国調査より」、奈良教育大学紀要 45 巻、204 頁
8　浅井、(2005)、前掲書、61 頁
9　浅井、(2005)、前掲書、7 頁を要約
10　山本直英、(1992)、『性の絵本 1～5 巻』、大月書店、3 巻 6 頁
11　藤澤 和子、川﨑 千加、多賀谷津也子、(2017)、『はつ恋』、樹村房
12　浅井、(2005)、前掲書、137 頁を要約
13　レイチェル・グリーナー、クレア・オーウェン、(2021)、『ようこそあかちゃん』、大月書店
14　ニルス・タヴェルニエ、(2008)、『赤ちゃんが産まれる』、ブロンズ新社
15　ロリー・フリーマン、キャロル・ディーチ(1990)、『わたしのからだだよ』、女性と子どものエンパワメント関西
16　レイチェル・グリーナー、クレア・オーウェン(2021)『ようこそあかちゃん』大月書店
17　山本直英、(1992)、『性の絵本 1～5 巻』、大月書店
18　谷口明広、(1998)、『障害を持つひとたちの性』、明石書店、15 頁を要約
19　河合香織、(2006)、『セックス・ボランティア』、新潮社、156 頁